

『漢簡』居延漢簡(一)(二)

早 苗 良 雄

このシリーズは、「現代書道は、写真・印刷の技術と通信網の進歩に伴い、急速な発展を遂げたが、反面、師

風類型と模倣作品の氾濫という俗な作品群の出現となつた。……この悪疫からの脱却は、数多くの古典との対峙

によつてなし得る」という目的のために出版され、全巻冊数は、一五〇冊を下らないという大規模な資料集成で

ある。現在の出版予定は、漢簡、金文、博文の三期までで、この漢簡は、シリーズの第一期にあたる。第一期

は、正編一二巻と続編で構成され、第一二巻に解説が付される予定である。本出版は、前述の目的の遂行に、竹、

木簡を利用する場合、数多くの全集、雑誌、単行本から引き出す不便を解消するために行われたのであるが、現

在、入手困難なそれらを容易にするという意味において、又、書道家の立場から、考察が居延漢簡に加えられ

るという意味においても、意義のある出版である。本来なら、シリーズ第一期完了後に書評すべきであろうが、

今、敢えて愚見を述べてみようと思つたのは、既刊の第一・二巻をみるにつけて、書道関係者ばかりでなく漢簡

研究に従事する者にとつてもより有意義なものになればと考えるからである。

漢簡は、漢代に使用された竹簡・木簡をさし、最近まで発見されたものを含めると、かなりの量にのぼる。こ

れらは、発見された状況から、中華民国時代、外国の探検隊が辺境の地（現新疆维吾尔自治区、甘肅の西方辺郡地帯）

で発見したものと、中華人民共和国時代に入つて、各地で発掘される墓で発見したものとに、大きく分類され特

徴づけられる。赤井氏が、この第一期で収集を試みられるものは、その代表的なもので、前者では、居延、武

威、敦煌、樓蘭の竹木簡と、後者では、新聞誌上を賑わせた生ける如き遺体に伴出した馬王堆漢簡、武威医棗

簡、江陵鳳凰山漢簡、雲夢大墳頭木方の様である。しかし、竹・木簡の発掘は、これらばかりではなく、過去に

は、戦国時代の長沙、信陽の楚簡、漢代の楽浪、ロプノール漢簡、晋代の尼雅、和闐木簡など、最近には、第一期の続編に取められる臨沂銀雀山竹簡の外に、湖北省江

陵望山楚簡、同省雲夢睡虎地秦簡などが出土しており、

漢簡でもこの中に含まれないものもある。それにもかかわらず、晉簡や馬王堆帛書を収集されるということは、漢簡という表題とからんで問題がないわけではない。

この第一巻、第二巻は、居延漢簡八冊中の二冊である。居延漢簡は、一九三〇年、西北科学考察団のスウェーデン考古学者フォルク・ベリイマン氏が、エチナ川流域の漢代遺址で発見、収集した約一万点の漢簡をいう。当初、この漢簡は、北京大学に保管され、馬衡、劉復の両氏とスウェーデン人のカルグレン氏によって解説、翻訳されることになっていたが、その後、勞榘、馬衡、向達、賀昌群、余遜らの諸氏によって釈文の校本が作成されることになった。しかし、日華事変のため、校本は、北京で亡佚してしまった。幸い、徐森玉、沈仲章の両氏が北京より原簡を持出しており、香港の商務印書館で、一九四〇年春を出版予定として印刷されることとなった。この時、漢簡全部をコロタイプにし、又、赤外線写真をもちいて撮影したが、遷延したために太平洋戦争の災厄に遭い、毀失してしまったのである。これは、一九三七年秋、上海で影印していた写真図版が、戦火で焼けたのについて二度目の不幸であった。しかし、この様な状況の中で、図版こそ断念されたが、研究に最初より従事していた勞榘氏の困難をのりこえた努力により、わずかな写真原稿によって釈文と考証（石印本で、釈文四冊、考証二冊）が一九四三年、四川省南溪の奥地で公表され

たのである（この出版事業は、中英庚款基金董事会によってなされたものである）。その後、一九四九年、上海の商務印書館から鉛印本（勞氏の名義ではあるが、同氏のものではないといわれ、釈読も著しく相違している）が、一九六〇年、台湾から大型本が公刊されたのである。図版は、一九五七年、勞氏によって『図版之部』として出版された。又、中国科学院考古研究所編の『居延漢簡甲編』が、一九五九年に、勞氏とは無関係に公刊された。しかし、いずれも整版技術の關係で写真の鮮明度に不満が残っていたところ、日本教育書道連盟から良好な写真をのせた『居延木簡』が、一九七一年に出版されて、一部分その不満を解消することになった。現在、図版は三種あり、続いて四度目の試みが、今回の出版である。しかし、前述の三種が、オリジナルなものであるのに比して、今回の出版は、勞氏の業績にのりこえたものである故、一線を画す必要があり、又、困難をのりこえた勞氏の業績は、他の誰にも譲れない貴重なものであることはいうまでもない。

今日、原簡は、そのほとんど全部が台北の中央研究院にあり、ベリイマン氏採集簡以外の四一簡で、もと、裴元善氏が所蔵していたものは、中華人民共和国中央図書館、商承祚氏、北京歴史博物館、上海博物館、南京博物館に分散されている。

この書を見ると、図版の写真は、勞榘氏の図版（以後、

勞氏の図版を勞図、積文を勞積、赤井氏の図版を赤図、積文を赤積と略称する)より、若干、鮮明であるものもあり、原簡から撮影しなおした『居延木簡』の比ではないが、今後の参考に資することもありうると思われる。又、積文については、後述する様に、期待される書道家としての積読は余り得られず、その大部分は勞積によっている様に思われ、一々その例をあげないが、記号や活字が勞積と寸分違わない個所も少なくない。赤積が勞積によったのならばそのことを序文に明記すべきである。この点を疑問に思うし、その他の問題もあるので順を追って指摘してみようと考ええる。

この書は、前述の三種とは異なり、赤井氏の意図により、右頁に図版を、左頁に簡形を示し、その中に積文を記して照合を容易にしている。これは、二卷一三七頁四九・二五Bの様な勞積ミスが発見できて甚だ便利であるが、その便利さは、別の問題を生むことになる。たとえば、勞積がありながら、勞図に簡影がない四簡(勞積一九六〇年大型本一一頁第二六葉五三・二、二三頁第五四葉四四六・一七A、五〇頁第二二葉三一・一A、五二頁第二二五葉三九三・九B)が、この『漢簡』より姿を消してしまっていることである。このことは、字の鑑賞に目的を求めらるあまり生じたものであろうが、資料集成ということからは、最後にも拾遺を作っておく必要があるだろう。

竹木簡は、通常、整理の為の簡番号がつけられるが、

数多い簡の中には無号簡も存在する。勞積では、それらをすべて無号簡としているが、赤積では三例(二卷八九頁、一五三頁、一五五頁)の如く欠番としている。ところが、一巻をみると、三一頁の簡には欠番すら与えておらず、一巻と二巻との間でその扱い方が異なっている。そのことは、碎簡の扱い方が、勞積(二卷八五頁二八八・一五、二三頁四三〇・九)の様に別簡とせず、勞図に従って一簡、又は碎(三卷一〇五頁)として統一しているのと比すると問題がある。簡番号についてみると、図・積文対称という方法が効果をあげ、勞積の簡番号の誤まり六四例(一巻三八例、二巻二六例)を訂正している。それにもかかわらず、赤積にも、なお四例(一巻一〇二頁二六九・一三は二六八・一三、一一三頁四六二・四は四六四・四、四六四・四は四六二・四、二卷九七頁四四五・四一同番号の簡が二簡あるので、上の簡をさすは四四五・六と訂正する)の誤まりがある。又、勞積にある簡番号の欠落を九例(一巻八七頁五二・一八、一〇二頁八〇・八、一三三頁五一・五〇、二卷三三頁五〇三・一八、三五頁一三一・四七、三九頁一一七・二六、二五五・二五、一一七・二六、一二三頁二〇八・四)ひろっているが、なお赤積にも二例(一巻一九頁五二三・二六、二卷一四五頁二六五・三九)おちている。

簡面をみると、字の鑑賞に目的をおきすぎたためか、勞積にある・回図などの記号が、赤積では多く削除されているが、残されている場合もあり、その基準がはなは

だ明確でない。私は、釈文はできる限り原簡に近いものを正確に作るべきと思うし、この様に記号が削除されることに疑問を感じるので、労釈のおとししているものを含めて、削除された簡番号を記しておく。又、釈文の正確を期するため、簡の行立てや字の位置についても検討を要する。行立てや字の位置は、空白部分との関連で意味があるので単に判読さえしてあれば良い、というものではない。せつかく示した簡形を無駄にする必要はないのである。現に、赤釈が労釈を訂正しているよき3例（一卷二三頁三〇三・一二A、一九頁四七・五、二二九頁二五五・二四A）があるにもかかわらず、労釈をそのまま踏襲した四例（一卷三二頁一九二・二五、六五頁一八三・一四、二巻一一頁四五・五、二二頁二二・二）や、赤釈の九例（二巻三三頁二二三・三八、五九頁三三九・七八、一〇五頁五六五・二三、一〇七頁四五七・一九、二巻一七頁一七九・八、二三頁五〇五・二二、六九頁四二二・一、二三三頁二〇八・四）この簡は、字を縦書きより横書きにすべき例―二三七頁四三七・五、四三七・一七）があるのはどうしてであろうか。やはり、図版にできる限り従うべきであろう。その意味で、一卷三三頁二二三・三八が図版で倒立しているにもかかわらず、釈文を一卷二〇三頁五四・一一、五四・一三の様に倒立させていないのも問題となろう。

次に、釈読内容について検討すると、労釈では、消えたり黒ずんだりして判読不可の場合、不可釈、又は、不可識

としている。これに対し、赤釈では字こそ判読していないが、一つから五つまでの字数を示す空格を入れている。できうる限り字を読みとろうとされる熱意には敬服するが一卷九三頁二〇・三が、労釈では一行目不可釈としてあるにもかかわらず無視してその数を示していないのはどうしてであろうか。また、事実、写真をもほとんど読めない様な簡の字数をどの様にして確認され、又、一から五までの字数に区別されたのだろうか。その簡を記しておく。この様にできるだけ読みとろうとされる方向に対して、赤釈では、労釈の中に示されている判読不能の字数を示す空格の記号が削除されているのはどうしてであろうか。そのみならず、文字が確認されるにもかかわらず削っている場合もある。たとえば、労釈にあるにもかかわらず読み字をおとしている二巻の一三頁五〇六・一、五一〇・一七、一〇七頁五五一・一一の三例を除外すると、簡面の墨色がうすくて読んでいない一卷六一頁五六〇・二七、五六〇・二八、一〇一頁三三二・三二や、黒ずんで読んでいない一卷三五頁一一八・三や、黒ずんでいるので、その一部分だけを讀んでのこりはその存在が確かめられるのにもかかわらず削っている一卷一〇七頁四四六・一七A、一一一頁四四六・一七B、一三三頁五一三・二一、二巻二三頁五〇三・五、五七頁五三〇・九Dや、簡が欠けて読んでいない一卷六五頁三六・一六、一一九頁一七一・二、二巻七五頁五〇七・一二A、七七頁

二八八・三四の如き例は、前述の不可積簡で積極的にその字数を示された姿勢とは趣を異にする様に思われる。積読は、労積の読みおとしと、訂正に力を注いでおられる様だが、労積の読みおとしは、二巻の一二例だけで、訂正は、一巻の一例、二巻の四三例あるだけである。まず、労積の読みおとしを示しておく。印が、赤積のひるっている文字である。七頁二五五・三(・・・松□土)、一七頁二三二・一九(東部大部塞)、一九頁五一五・三七(・・・定□)、四七頁三二・二五(謹奉為)、五三頁一五・一九(得饒丞彭・・・)、五七頁四〇一・四A(・・・中舎食十・・・)、八七頁五三三・二(・・・都里上造傳)、一〇九頁三五・六、(・・・威年卅六・・・)一一三頁四五・一二(・・・仁里□卅一歳)、一一三頁四五・二八(・・・隣移過所)、一一七頁二〇三・一〇(・・・三升少)、一二七頁一九五・六(前須人塞)。労積の積読訂正は、私の気づいた範囲では、一巻ではほとんどなく、五七頁五・五の一例のみであるが、二巻では、四三例ある。その外に、労積、赤積ともに誤読が認められるのは、一巻で五例(一七頁三四六・三〇、三四六・四三、六七頁七・二、八五頁五六二・二七、三八七・一九、八七頁五一七・二四、九五頁一〇〇・一)、二巻で七例(一一頁五二・三五B、三一頁三二・七一漢書地理志をみると、陔が正しい、四二頁二一八・一八、六七頁三九五・一〇、八九頁五〇・一、一一五頁四四・一七、一四九頁三三二・三八A)ある。個々の訂正については、別表に労積、赤積を

示して結論を記しておいたので参照していただきたい。積読訂正でみられる問題点を整理してみよう。簡文の誤字についてみると、一巻と二巻の積文の扱い方が異なる例がある。それは、一巻七七頁三四九・三三の誤字、伐、を正しい、代、と記しているにもかかわらず、二巻三三頁一三一・一八では、誤字の、榮、をそのまま記して表記の違いが生じていることである。やはり、この場合、労積で誤字を記して注釈を加えている様に、なんらかの統一性をもたすべきであろう。長簡(二巻一五二頁二六・四、三三三・二三、三三三・一〇と二六・三)は、一四九頁と同簡であるが、二分して撮影しているので注釈しておく必要がある。王莽時代に使用された特殊な数字≡(二巻三三頁五〇六・一、一二七頁四八四・一〇)は、そのまま≡を使用して四としないのが原則である。それは、特殊数字が、その木簡の年代比定の重要な鍵になるからで、この点もぜひ留意してもらいたいところである。

ミスプリントについて、訂正を加えておく。二巻五一頁五三〇九Aは五三〇・九A、七三頁六二八Aは六二・一八A、六二二〇は六二・二〇で、・がおちている。又、二巻六一頁四一三・七は四一三・七である。二巻一七頁一七九・一〇の様に、簡中に積文が収まっていないものや、一巻七五頁二八四・四B、一四七頁一〇・八の簡番号が、他の簡にくっついているものがある。わずかなミスであるが指摘しておきたい。

今まで述べてきた様に、この膨大な資料集成の編纂は、竹木簡の利用の不便を解消し、資料入手を容易にした。又、書道家が、書法、筆法上から解説したという特色をそなえて有意義な出版であるが、次の諸点を指摘してまとめたい。このシリーズの編纂にあたり、書の冒頭でその資料のオリジナルのものについて解説していないことは問題であろう。書道家が、居延漢簡に解説を行なうのはこれが二度目であるが、事実上、一度目の『居延木簡』の釈文が、全く労釈にたよっていたことを考えると、書道家独自の釈読は今回がはじめてであるので期待される。ただ、居延漢簡の釈読は、労氏の『居延漢簡』ばかりでなく、中国科学院の『居延漢簡甲編』の釈読や、その後の補正も^⑧検討しないと完全とはいえないだろう。その成果は、読みおとしでは、二巻の一・二例、釈読訂正では、一巻の一例、二巻の四三例(八五頁一七〇・五Aの読みは、よい例である。)に認められるが、一巻の五例、二巻の七例など、読まれていない箇所があるのは残念である。又、この書の特徴である図・釈文対称は、数多くの成果をあげている。それは、労積ミスを拾ったり、簡番号の誤まり、欠落、行立て、文字の位置などを訂正できたことである。しかし、一方では、労図にない簡は、その存在を失ったり、簡番号の誤まり、欠落、行立て、文字の位置の悪いものが目立ったりして、不統一を発見しやすくする効果も生んでいる。この不統一は、次

についてみるとより明らかとなる。たとえば、無号簡や簡文の誤字の扱い方が、第一巻と第二巻で異なったり、又、記号の削除基準が不明確であったり、図版で倒立している簡の釈文の扱いが異なったりしていることである。又、釈読については、不可釈で字数確認や区別をしているのに、労釈の示す判読不可能の空格を削除したり、文字が存在しているのに削除していることである。この様な第一巻と第二巻の方針の違いは、大部な刊行物全体の価値をおとすことになる。膨大な資料集成を編纂する上では、最初からはっきりした方針をたてて、まず、凡例で示し、それにもとずいて編纂されるべきではなからうか。折角の大事業であるから、よりよき資料集成となることを期待しつつ筆をとどめたい。

(第一巻 赤井清美編 東京堂出版 一九七五年一〇月一五日発行、定価六〇〇円、第二巻 右同 一九七五年二月一日発行 隔月刊、附録 馬王堆帛書(老子乙本部分))

注

① 大庭 脩教授「森 鹿三先生と木簡研究」(森 鹿三著 『東洋学研究』居延漢簡篇 所収)、なお、これらの報告、研究論文については、拙稿の「簡牘研究文獻目録」(同書所収)を参照されたい。(一九七五)

(以下八七頁へ続く)

別表1 (Aは赤積が, Bは労, 赤積ともにおとしている場合を示す)

1 巻			2 巻	
記号	頁	簡番号	頁	簡番号
●	B 53 B 79	80.2 11.4	A 45 A135 A135 A135 A151	32.25A (数が多い) 49.25A 49.19 217.26, 49.17 480.16
回	A 67 A 77 A 95 A125 A147 A147 A147 B 38 B 67 B111 B111	7.8 (労積指摘) 284.25 (") 100.1 181.8 138.3 10.9 183.7, 183.2 74.1 10.7 428.2A 428.4	B 77 B 99	288.16 293.5
☒	A131 B121 B129	255.24B 29.3A 255.24A	A 41 A 71 A 75 A 83 A 89 A 95 A 97 A 99 A 99 A135 A135 A135 A137 A137 B 51 B 71 B 73 B 75	163.15 393.7 62.18B 288.19A 50.26 393.9B 368.11 393.8 393.9A 49.5 49.8 49.6A 49.3 49.4 393.10 393.6 62.18A 288.18

			B 85	288. 24
			B 93	456. 1
			B101	63. 16
			B137	49. 6B
			B137	49. 7
			B137	49. 8B

別表2 労積で不可積，不可識，無字としたものを赤積が数えた字数により分類した。(頁，簡番号を示す。)

字 数	不 可 積		不 可 識	無 字	そ の 他
	1 卷	2 卷	2 卷	2 卷	1・2 卷
1			51(530. 9A)		
2		29(77. 78) 99(243. 58 B)	51(371. 1A) 53(530. 9B) 55(530. 9C) 55(271. 1C) 57(371. 1D)		
3	115(212. 20) 117(121. 32B)	87(243. 58 A) 139(119. 46)	53(371. 1B)		
4	93(343. 1) 123(171. 17B)	89(50. 21) 97(243. 58 A)			
5	7(182. 32) 35(118. 8) 49(495. 18B) 49(502. 13B) 49(505. 32B) 75(537. 2B) 75(564. 27B) 75(346. 37B) 77(349. 1) 115(212. 35) 115(212. 53) 115(212. 30) 115(212. 96) 119(171. 14)	9(182. 36) 11(502. 10B) 11(509. 29B) 11(503. 11B) 29(77. 59) 29(77. 15) 29(77. 18) 29(77. 32) 29(77. 45) 71(455. 21) 71(393. 6) 75(62. 37B) 75(62. 18B) 85(170. 9A)		71(155. 2)	1卷93(20. 3) 2卷39(117. 2) いずれも労積なし

119(334.38)	85(288.15)		
119(171.7A)	97(243.57A)		
149(199.11A)	127(184.2)		
	139(119.51)		
	141(119.14B)		
	141(340.24)		
	151(238.31)		
	153(238.26B)		
	153(103.18)		

別表 3-1 □が労積にあつて赤積で削っている簡番号

1字(空格が1つ)

1 巻				2 巻			
頁	簡番号	頁	簡番号	頁	簡番号	頁	簡番号
17	346.44	87	517.9	123	169.3	5	504.13
17	433.9	89	102.5	127	181.6B	13	510.11
31	192.6	89	515.24	143	509.5	19	516.19
31	192.16	89	102.11	145	505.9	19	516.30
33	213.9	89	112.8			19	516.26
35	332.4A	91	19.9			19	515.45
37	249.2	93	20.3			19	516.12
37	248.1	93	149.29			19	515.32
37	248.15	103	54.21			19	514.42
37	248.18	105	403.10			19	514.44
37	280.2	109	446.15			39	118.24
37	280.9	109	446.14			41	163.18
39	74.21	113	462.2			45	32.24
45	182.43	115	212.71			61	241.4
45	149.41	115	212.61			61	241.11
45	149.30	115	212.62			75	243.22
59	300.15	115	212.73			75	243.20
59	350.21	115	212.68			81	455.16
69	41.17	117	334.11			97	451.3
75	339.5B	117	334.24			101	63.1
75	14.26B	121	29.12			125	36.26
75	284.8B	123	171.10			139	119.24
87	521.34	123	334.18B				

別表 3-2

2字～8字 (空格が2～8つ)

1 卷		2 卷			
頁	簡 番 号	頁	簡 番 号	頁	簡 番 号
2字					
7	522. 8	7	268. 18	39	118. 5
35	237. 10	11	268. 35	87	170. 9
63	274. 19	19	511. 21B	87	243. 32
115	212. 52	19	517. 13	95	561. 2
119	334. 20B	21	514. 20	95	114. 21
141	513. 32	39	514. 32	101	17. 7
			118. 29		
3字					
71	126. 16A	11	508. 24B	47	155. 1
117	121. 12B	19	508. 25B	61	241. 49
127	233. 8	19	515. 22	105	127. 25
		41	516. 31		
			163. 19		
4字					
85	387. 21	57	130. 9	83	327. 6
5字					
113	446. 17C				
6字					
133	513. 50	45	204. 3		
8字					
61	263. 1				

別表3-3

☑を含んで多くの字の存在を示した労積と異なる簡

1 卷

頁	簡 番 号	頁	簡 番 号	頁	簡 番 号	頁	簡 番 号
19	90. 41	45	149. 32	67	7. 20	97	116. 40
21	247. 10	45	149. 15	69	41. 10	99	339. 28
21	247. 54	45	120. 29	69	31. 6, 31. 9	99	339. 8
21	247. 36	45	149. 49	75	332. 7B	99	336. 29
29	341. 3	45	120. 11	83	324. 8	99	336. 44
29	341. 1	45	120. 25	83	407. 8	101	117. 30
31	192. 31	45	149. 46	83	336. 2		
31	216. 1	45	149. 16	85	306. 17		
31	192. 7	45	149. 40	87	517. 2		

33	213. 40	45	120. 21	87	520. 6		
33	213. 50	45	120. 23	87	520. 21		
35	584. 2	47	495. 18 A	87	521. 2		
39	97. 11	49	495. 6 B	89	90. 33 A		
39	74. 8	51	332. 14	89	90. 48		
39	97. 10, 213. 1	51	335. 49	89	90. 49, 90. 89		
39	87. 16	51	335. 25		90. 68		
39	97. 13	55	120. 36	89	90. 28		
39	97. 12	55	149. 60	89	102. 12		
39	97. 5	55	120. 56	93	523. 12		
39	87. 3	55	120. 76	93	523. 7		
45	182. 1	57	7. 33	93	523. 5		
45	149. 2	61	246. 38	95	250. 2		
45	182. 27	67	7. 29	97	218. 27		

別表 4-1

頁	簡 番 号	勞 積	赤 積	結 論
	1 卷			
17	346. 30	君單衣一領夜亡去	君單衣一領夜亡去	夜亡去のみ判読可
35	346. 43	既不奉斤	昭武□	昭武卒
39	237. 32	…作徐	…作徐	…作徐
57	87. 17	東望棗	東望燼	東望燼
57	5. 5	史□叩頭（後書）		史□叩頭（後書）
67	7. 2	廣各	廣各	廣谷
85	562. 27	鳥	鳥	鳥
87	387. 19	子肥子	子肥子	子肥
87	517. 24	東郡戌卒阿靈	東郡戌卒阿靈	東郡戌卒東阿靈
95	100. 1			
	2 卷			
11	512. 35 B	本如	本如	本始
11	506. 10 B	累	界	界
11	505. 23 B	用	同	同
13	506. 1	門	戸	戸
17	179. 6	土	出	出
19	515. 29	□	始	始
19	515. 40	女	卅	卅
19	515. 41	李道年女八入	李道年廿八人	李道年廿七
21	498. 3	百廿四	百卅四	百卅四
23	503. 10	城官々亭	城官二亭	城官二亭

25	503. 3	五 肩 候	六 掖 府	五 掖 府
31	32. 7	陽	□	陝
41	118. 18	傷	成卒	傷成卒
43	96. 2	門	戸	戸
		並	並	直
		なし	出	出
		一日	百卅	百卅
45	32. 14B	票	票	粟
		土	大	大
59	130. 9B	なし	□得□	□得□
65	454. 24	□	卅	卅
65	454. 9	□	次	次
67	395. 10	菴	□	□
		拆	拆	木
		卽	印	印
71	170. 3B	便	使	使
81	62. 52B	一匹	二匹	二匹
83	507. 3A		并	并
85	290. 4		廿八	廿八
85	170. 5A	共	幣	幣
89	60. 4A	弊	候	候
89	50. 1	修	少史	少史
95	169. 11	力丈	凡	凡
97	445. 6	定	幣	幣
105	127. 24	弊	會	會
105	127. 20	□	望	望
107	551. 1	晉望令	令晉	令晉
107	551. 27	歎	欲	欲
107	551. 28	往	□	往
		遷	造	造
		鑾	渠	渠
111	45. 8	廿	卅	卅
115	44. 17	候	候	使
		千	見	見
115	44. 9	塞	案	案
117	484. 10	惠	遣	遣
119	57. 11	□	延	延
123	238. 39	無	母	母
127	260. 15	酉	丑	丑
131	26. 12			

137	147. 14	懷	獲
137	437. 34	息	□
141	218. 2	母	母
143	218. 55	□發	□
143	218. 30	前	苛
149	132. 36	○丞	十
149	132. 38A	丞	丞

- ② 森 鹿三氏「最近における中国学界の動向」東光二（一九四七）
- 米田賢次郎氏「居延漢簡とその研究成果 上」古代学二（一九五三）
- ③ 大庭教授「書評『居延木簡』」史泉四七号（一九七三）
 もっとも、文字の鮮明な簡をえらんで写したので、労図でも甲編でも、鮮明に読みとれるものがほとんどである。
- ④ 森鹿三氏「新刊『居延漢簡甲編』によせて 下」極東書店「書報」二（一九六〇）
- ⑤ 別表 1
- ⑥ 別表 2
- ⑦ 別表 3
- ⑧ 別表 4
- ⑨ 森 鹿三氏「居延出土の王莽簡」東方学報京都三三（一九六三）
- ⑩ 陳直氏「居延漢簡甲編 釈文校正」考古四（一九六〇）
- 陳直氏「居延漢簡甲編 釈文校正（続）」考古一〇（一九六〇）
- 陳邦懷氏「居延漢簡甲編校語」考古一〇（一九六〇）
- 陳邦懷氏「居延漢簡甲編 校語増補」考古八（一九六一）
- 于豪亮氏「居延漢簡甲編 補釈」考古八（一九六一）
- 于豪亮氏「居延簡校釈」考古三（一九六四）
- 末筆ながら、本稿作成にあたり大庭教授の御指導をいただいたことを記して、謝意を表す次第である。

（本学大学院博士課程在学）